

『その時、歴史が動いた』後記

松下重男

さる七月、放映されたNHKテレビの『その時、歴史が動いた』のインタビューの際、一段落したとき、プロデューサーの質問がありました。

『金子翁が整理後、意気消沈の状態がどんなであったか』と、その話が聞きたいと、私はその時は、えっと言葉に窮した次第でしたが帰宅後、よく考えましたら次のような結論に達しました。

私が金子翁にお伝えしましたのは、昭和十三年頃から応召した昭和十七年暮迄の間であり、昭和二年の整理から既に十年以上の経過もあり、全然整理後の悲壮感なく、会社は順調に動いて居り、私達の立場としては一流の勤務が出来得たものと思っています。

当時お家様（よね刀自）、大主人様（岩治郎）、金子翁は法的役員としての名はなく無官でありました。しかし、翁は一年三百六十五日、休みなく出社された次第で公私なく公が私であったようです。

初代岩治郎社長死去の際、親族会議で廃業云々の意見のあるなか、お家様は番頭である金子翁を信頼し全責任、権限を与え存続を決意されたそうです。

それにえ翁は『士は己を知るものの為に死す』の気概で奮闘努力

の結果、鈴木商店の大飛躍がありました。

その後昭和二年の運命の日に際しても、お家様は泰然自若として『エレベーターが下るような気持だが、また上るだろ』と、再び翁を信頼して再建を託された次第で、その恩義に報いる為、滅私奉公された次第であると思っています。

昭和十七年頃は、太陽産業は日商、神鋼の大株主でもあり、神鋼の田宮嘉右衛門社長には翁として一番無理を言える仲であったようで、親密な会話が度々ありました。

戦時下、神鋼も拡張の時代、太陽の子会社が脇ノ浜工場の土地埋立事業を担当、相当の利潤を頂いた次第です。

昭和二年に手離した一ノ谷の社宅（翁入居）を右子会社が買戻し、内装も済み翁に入居をお願いした訳ですが、辞退され従来の御影の社宅で昭和十九年に死去された次第です。

戦後、昭和二十一年頃、其の一ノ谷で私達は、社宅の芝生を掘り、さつまいもを作り、給与の足しにしたり、そこに入居している社員と海水浴に行き、ばか貝をとり、ドロクで乾杯し、戦後の苦しい時代を過ごした思い出の社宅は即ち金子翁の夢のあとでした。

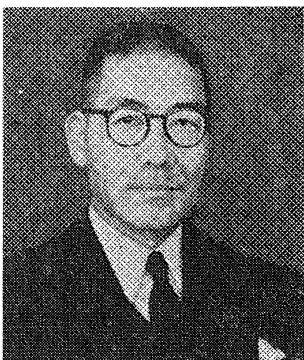
鈴木商店、金子翁も亡くなりましたが、当時の事業も人も残り現在まで、それぞれ脈々として存続されて居り、昭和三十五年、当時の『同じ釜の飯をくった』人々が数百名相寄り、全国辰巳会が発足されました。

私の新語として『万骨功成り、一将枯る』は如何でしょう。

天職に生きる

落合豊一

元日商(現・日商岩井)株式会社社長



卒業（神戸高商）が間近くなるにつれ、あちらからも、こちらからも就職の口がかかってきた。現在の就職難時代から考えると、まるでウソのようだが、その当時は

第一次大戦ばつ発まもないころで、非常な好景気、ムコ一人に会社が八つとまでいわれた時代である。卒業者の全員に対して各会社から猛烈な引抜き合戦が行われた。私に対しても同時に神戸の鈴木商店と、三井物産から誘いがあった。私は神戸高商時代の恩師津村秀松教授のすすめにしたがって、鈴木商店に入社することとした。

大正六年の春である。私は当時満二十二歳、いよいよ実社会に一步踏み入れたのである。

鈴木商店に入社すると同時に、まず外国通信課に勤務した。こゝでは世界各国に散在している出張所や、支社との間の通信などについて連絡を続けていくのである。三ヶ月のち、こんどは受渡部に回された。こゝでは主として倉庫係をやらされたが、これがなかなかどうして、なれるまでが大変なのである。毎日人力車に乗っては倉庫回りを

するのである。そして、入庫の数と、帳簿上の数が間違っていないか、一々チェックしていくのだ。当時電気銅の輸出が非常に盛んで、倉庫の中にはいつもギッシリ電気銅が山積みされていた。

電気銅の計量をするときに、その桿をきめる方法が非常にむずかしい。初心者の私にとってはつぎからつぎへと目にもとまらぬ早業でテキパキ処理されていくのを見ると、果たしてこれで正しいのか、どうかトッサには判断しにくい。『ちょっと、いまのところ変だからもう一度やり直してくれ』なんていうもんなら、浜の荒くれ沖仕たち、眼をむいて『一々、そんな悠長なこというとつたら、仕事もなにもできない』とものごいけんまくだ。結局、この倉庫係を三ヶ月ばかりやったが、どうしても熟練の域まで達しなかった。

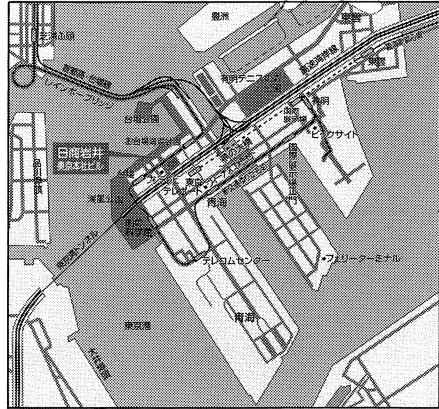
そうこうするうちに、突然八月半ばのひる下り、支配入室からの呼び出しがあった。『一体何事だろう。なにかお叱りでもうけるのか』半信半疑で支配入室に入った私に下されたのは、なんと『海外派遣』の命令なのだ。そのときの喜び、いまに至るも到底忘れることの出来ない感激の一瞬だった。しばしばう然としている私に、支配人はこういった。『こんど、君を入れて六人ばかり海外派遣させることにしたが、君の成績が一番いいので、ロンドンでも好きなところをいい給え』瞬間、私は『一体どこにしたものだろうか』としゅんじゅんした。しかし私の脳裏にひらめいたものは華やかなニューヨークでも、ロンドンでもなかった。そこにはおびただしい小麦の山積された小麦の一大メッカ、北米シヤトルの姿が浮かび出てきたのである。神戸高商を卒業するときからの念願『小麦問題』と力の限り取組みたいとの熱情がうつつとしてわき出てきたのだ。

『世界一の小麦生産地であるシヤトルにやって頂きたい』と私はいつ

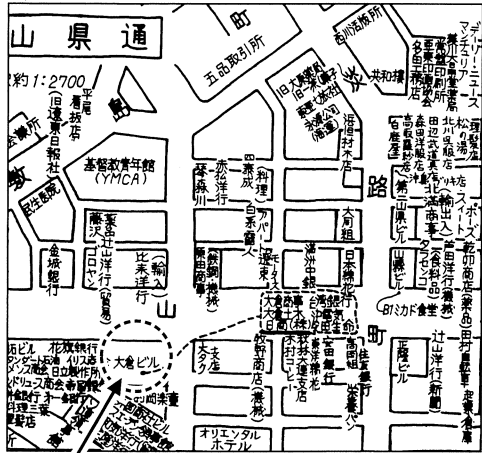
現在の日商岩井東京本社と日商(株)大連支店



日商岩井(株) 新社屋



日商(株) 大連支店



日商(株) 大連支店 (昭和13年頃)

た。瞬間、支配人は不審な顔付きだったが、私の熱情を聞くにおよんで『うむ、しっかりやるんだな』と快諾。私のシヤトル行きが決定した。

その当時、私の月給は十五円もだったが、海外派遣の仕度金として支給されたのがなんと六百円也という大金。私にとって生まれてこのかた握ったこともない大金だ。さっそく神戸元町のナンバーワンといわれる『柴田洋服店』に押しかけて『とにかくアメリカに行くんだから、とび切り上等の服を頼む』というわけで、一着四十円もする背広を春秋夏冬一着を注文、さらに『アメリカ行きの船の中では晩飯の時にタキシードを着るのがエチケットだ』という先輩の言葉を信じて、五十円のタキシードをも注文した。

当時、シヤトル市は人口約三万人、時あたかも第一次世界大戦中のことで、とりわけ諸物資の輸送上、極めて重要な地に当るだけに、その殷盛ぶりも相当なもの。各国の有名商社の出張所、支店が目白押しと並んでいる。そのシヤトルの港からほど近いファースト・アベニューという街の一角、六階建のコルマンビルディングの三階が鈴木商店の出張所だ。

所長は勝屋利秋氏、さらに所員には木村謙三、戸田正太郎両氏と、アメリカ人のエバンスがおり、そのほかに外人の女事務員四名がいた。

※ ※ ※

大正十三年もくれ、さらに十四年、十五年と過ぎたが、一向に社運はばん回されない。

だが、われわれは最後まで闘うことを固く心に誓っていた。そして、私ら海外派遣から帰ってきた同志たちはとくにつとめて、真剣に社運

ばん回の対策、さらには今後の方針などを検討し合った。その当時のつどの会を『二月会』と名づけたが、帝国人絹会長大屋晋三、三菱レーヨン社長賀集益蔵、神鋼電気社長中井義雄、帝人製機社長小野三郎諸氏はみなこの『二月会』のメンバーであった。『二月会』メンバー懸命の社運ばん回対策も、ここに至っては最早どうにもならず、ついに昭和二年四月、鈴木商店は倒産した。

二千名にのぼる社員たちも同時に失業者として、世の荒波に放り出されたわけだが、ここで彼らにとって最後のノゾミとなったのはもちろん退職金問題。

幸か、不幸か、このとき私は廿名からなる対策委員会の委員に選ばれたのである。委員たちは鈴木岩治郎社長にかけ合った。だが、社長はただ『ないソデはふれぬではないか』というばかり。

そこで、われわれも『もし金があればどうする。われわれで金をねん出すればそれを退職金として支給してもらってもいいか』と念を押した。サアーそれから全支店ならびに出張所員にまでゲキをとばして、コゲつき代金の回収に全員ヤツキ、とうとう想像していた以上の資金を集めることができた。やがて、平均にして三、四千円見当の退職金が支給された。その当時の四千円といえば大金。失業したということもこのときはばかりは忘れ、結構愉快な気分を味わったものだ。

私は自分だけが一番最後になっても、残った連中をなんとか就職させようと、日本製粉や、その他の会社にあっせんするうち、突然、鈴木商店の後継会社として大阪に設立された日商株式会社から、入社しないかとのコトバをうけた。

(徳島新聞(昭和三十年頃)より一部転載)